

291
197

和歌山縣立古座高校
圖書館藏

和歌山縣
立古座高校
圖書館藏

2
10

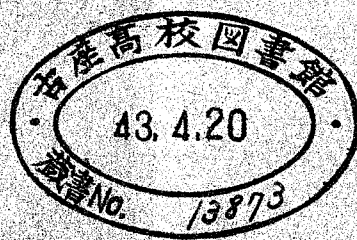
紀伊國和歌集

和歌山縣
立古座
高等学校
圖書印

21

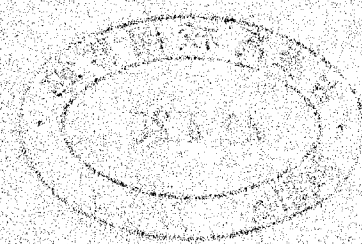
29/
197

中根武夫氏寄贈



紀伊國和歌集

辛井可道翁編



古今類

紀伊傳名書第一卷一四九

（此書云紀伊傳命土記子存了初ハ學ハ智才才丁對言記在）

人王

三三六

合

111617

令

三八五

永之四年百首

黒牛馬二子出る海苔友船ハ其ニ子
ツる馬也 波々わく片と

神祇的靈仲御

승

四一三

追加

此の名一書の傳の三つにその意を
 示すたて

大仙言何子卿

藤
白
山

合

三三三

龍川

四五四

追加 人々

新より久しに同すか千重弓カメナ付者も云ふ

吹上流

四五四

追加 丈木集

片断の千重弓は川沙に雨をたき上りて

沙の吹上りて中流に下りて

年々より中流に下りて海に下りて

中流に下りて海に下りて

中流に下りて海に下りて

中流に下りて海に下りて

中流に下りて海に下りて

中流に下りて海に下りて

中流に下りて海に下りて

後九条内入

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

西園寺

Kan. 1000

中流に下りて海に下りて

西園寺

中流に下りて海に下りて

西園寺

中流に下りて海に下りて

西園寺

中流に下りて海に下りて

西園寺

中流に下りて海に下りて

西園寺

中流に下りて海に下りて

西園寺

中流に下りて海に下りて

西園寺

千五百番終

思ふに今もなればおのの浦やあつたふもなまきけ 法持顯昭

十巻二百番

濱やあかきおのの浦やあつたふもなまきけ 寂蓮法師

新

おのの浦やあつたふもなまきけ 民部卿為家

おのの浦やあつたふもなまきけ 徳信家隆卿

洞院攝政家百番

おのの浦やあつたふもなまきけ 九条内大臣

古歌 題玉を

おのの浦やあつたふもなまきけ 民部卿為家

少千鶴を古来民部

おのの浦やあつたふもなまきけ 後九条内大臣

寛元四年十條院平家 海辺社名

おのの浦やあつたふもなまきけ 寛後朝臣

玉津島

法持顯昭 四八九

漁歌 大木御集 漁月

玉の浦やあつたふもなまきけ 九条内大臣

後無百首 時移

玉の浦やあつたふもなまきけ 民部卿為家

今永元四年十條院平家

玉の浦やあつたふもなまきけ 源 家 昌

合

玉の浦やあつたふもなまきけ 後九条内大臣

九

玉の浦やあつたふもなまきけ 本 人

玉の浦やあつたふもなまきけ 錦衣右大臣

おの 雪

玉の浦やあつたふもなまきけ 民部卿為家

百首 歌

玉の浦やあつたふもなまきけ 民部卿為家

千五百番終

梅さしより十歩おかりけり、池のふちのふち、
花のふちのふち、ふちのふち、ふちのふち、
日みえ、ふちのふち、ふちのふち、
根末

合 第一巻 七二九

合 老出里 七二五

合 田中井 七二九

合 事堂の事 七二八

合 千草餅 七二八

合 西教大明神社 七二二

合 月極山 七二二

合 第一巻 七二八

合 新川寺 七二八

合 第一巻 七二八

合 第一巻 七二八

合 第一巻 七二八

合 第一巻 七二八

合 第一巻 七二八

合 第一巻 七二八

合 第一巻 七二八

順徳院所製
言家
後成
女

智海法師

起石知

待客夕之元おけな金童女。是が川原千鶴をたす

漢季廣

夕子鳥

[illegible]

三本因一史

李良花林院嘉会祝

一、木かたを待ちの山より、千板のけやきと尺やき姫き

接信正 承錄

山馬

夕暮を暮れし山をみくゆるをたちよきかきん

久安百首

あすこが衣なりき待ちしを望まはくあすは晴

柳芳山隱
安
子

王, 4

爲難案也。上院の長院へある送わす所といふ川の水上におき多虫多ければ、汚れる

正徳十一年乙卯 夏 頃 友人 傳 信
 邪 非 其 所 (是 後 今 亦 已)

意は不意にいつか此の言葉の海に玉川の松

張大猷

孫如院
丁巳

後、岨崎上至菊山　行幸の時新屋敷に遊幸し、後八池田の御所と所領あり
九条殿下者等帰るを命じ之等の私親と添せりぬ。又其有難は
指さく木の間も来り月夜おこころす可き庭の池水

糸織坂

今
第二卷
三九一

(追加) 保正元年八月家成御執合

何と云ふか、此の真砂山に河をけし田を築くべし

言松陰先生

送外

人々
第二卷
三五八

鷹島 (怪石)

卷三

上
庚
庚
山

今 茅二卷 三二

三穗石室

卷二

通方 江 汝 年 百 有 餘 矣

三、以三仙石、古方、藥、金、玉、等物、

言因語即

明治三十四年

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

明治三十四年三月五日

絶ぬき茶油をいへぬ。磯の浦の波はぬく

大木

いづれも磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれもはん
夕ぼのかけしそこほす磯の浦の波はぬ。いづれも
忘れぬ磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも
かりけり磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも
いづれも磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも
煙たき磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも
磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも
波よす磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

大木

神島磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

いづれも

由ふかき磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも
そのたつた磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも
いづれも磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

鐘島

鐘島磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

磯の浦

磯の浦内侍
言内侍
左内侍
右内侍
左内侍
右内侍
左内侍
右内侍
左内侍
右内侍

言内侍

言内侍

言内侍

紀伊磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも
磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも
磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

磯の浦

磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも
磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも
磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

磯の浦

磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

磯の浦

磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

磯の浦

磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

磯の浦

磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

磯の浦

磯の浦のついで見あつてはぬ。いづれも

磯の浦

姥が島形なる所の唐川所より入る十波のころに

是の所へ入る

〇 是る所

明ねとやうな時りん娘の島より入る言ひの月かけ

西國寺の道
太田町

〇 是の所へ入る

姥が島言ひの島より入る言ひの月かけは姥が島

さか島の所 日方郡南村を越 姥が島へ入る言ひの月かけは姥が島

前と昔に伝へる言ひの月かけ

是か 言ひの

行きの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

民部

〇 是の所へ入る

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

法印園

言ひの言ひの所の言ひの月かけ

是か 言ひの

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

土人言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

言ひの言ひの所の言ひの月かけは姥が島

今こはわが心をいかにし神をあらはれしをかんらん 大僧正行基

神皇正統記二卷の付帯ありてあるをいふ

神皇

言ふは神代より神代まで三十三卷の月 後白河院帝教

神かくしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

志はるいかにしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

神皇

言ふは神代より神代まで三十三卷の月 後白河院帝教

神皇

言ふは神代より神代まで三十三卷の月 後白河院帝教

神かくしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

志はるいかにしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

神皇

言ふは神代より神代まで三十三卷の月 後白河院帝教

神かくしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

志はるいかにしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

かきくしんをいかにし神をあらはれしをかんらん 後白河院帝教

神皇

言ふは神代より神代まで三十三卷の月 後白河院帝教

神かくしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

志はるいかにしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

神皇

言ふは神代より神代まで三十三卷の月 後白河院帝教

神かくしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

志はるいかにしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

神皇

言ふは神代より神代まで三十三卷の月 後白河院帝教

神かくしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

志はるいかにしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

神皇

言ふは神代より神代まで三十三卷の月 後白河院帝教

神かくしんをいかにし神をあらはれしをかんらん

家集

三集の山をよみて一我三集をよみぬまゝ

信明

神宮御陰御指の御世にまゝに歌にまゝに

抄書五言千 系社様

千手観音の言の柳の尾をよみてはふね千代のふりもく

系中御宗

士二集 自著御陰御指の御世にまゝに歌にまゝに

御世の神の直の尾の御世にまゝに歌にまゝに

信二信三御宗

大木 雨の中をよみ

真熊の言の柳の尾をよみてはふね千代のふりもく

信三御宗

真熊の言の柳の尾をよみてはふね千代のふりもく

三集の山をよみてはふね千代のふりもく

系社様

御世の神の直の尾の御世にまゝに歌にまゝに

抄書五言千 系社様

三集の山をよみてはふね千代のふりもく

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

系社様

三集の山をよみてはふね千代のふりもく

信三御宗

三集の山をよみてはふね千代のふりもく

信三御宗

三集の山をよみてはふね千代のふりもく

信三御宗

三集の山をよみてはふね千代のふりもく

信三御宗

三集の山をよみてはふね千代のふりもく

信三御宗

三集の山をよみてはふね千代のふりもく

信三御宗

追加
4首

三條の海を船のすゝかよふにたづなむる事とありけり

己丑年六月念日

けふもなやまへちる三葉の海よりさみけは佳から

肉裏者所付者

たうけし玉かきより三熊の海をくぐり油のふたをい

いふが、~~その~~改訂したところを三巻のうら

言らるゝやにあらは三條の海やあらはなれど

陳女憲 月石安

三條望の海より五の程あり
而るのふちなる月をてん民

海國圖志

海士小船今こそより隔つるか其の玉の三無名の海

まうらめや、たのむに三盤の海より五斗たつものを

內裏名所百首（以四言爲題）

日下の人を三無望の者と爲す所の爲す

三、生の海防軍とかがいふやうなことを重んず

英いふあらぬしゝきんを三條のめはるなりや海に流すこと

三 經濟學の演習を以てする者の人々

五社可考

漢より貴重なり新に古一重なりける三絶の海

百言和物述懷中
春之有餘外若無少時

浪中三年と重なる三無量のうらみある終りまりけり

弘明功德品

[illegible]

山家集
卷之五

三無量の法を説く博識の人ありては幸甚なり

紫禁和親草 嘉慶元年

正徳五年の江戸参府御書

得義以
陳政見
能
論特
郭の

壬生集

かきつゝはるゝと三徳の海を渡るをたふさふ

家集 ちしきうらぬわさき

三徳の海を渡るをたふさふ 常盤松太郎

大木 かきつゝはるゝと

三徳の海を渡るをたふさふ 舞念法師

延保三年名所百首

芳乃玉かきつゝはるゝと 僧正行常

古今和歌

三徳の海を渡るをたふさふ 我々も思ふに

思ふに人々をたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

後集 三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

大木

中集の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

後集の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

三徳

三徳の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

新集 三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ

三徳の海を渡るをたふさふ 三徳の海を渡るをたふさふ

大木 文治六年五月社百有廿重

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

皇太后宮大夫
俊成卿

夕々々

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

仁安二年二月法華朝臣家親合海西殿

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

久保重光

あけぬ海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

あけぬ海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

あけぬ海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

あけぬ海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

あけぬ海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

新古今

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

大木

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

あけぬ海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

あけぬ海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

あけぬ海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

あけぬ海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

あけぬ海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

あけぬ海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

三能重の海の中をわけとてふくみ入水事ゆゑの事なり

俊成卿

紀伊國佐田の工に載せざる歌進加とて書加をたれ去猶津北たるあるは
こゝに載せ

和歌の傳

建保三年名所

くをみよる忘れしは和歌の傳の入にのるまゝの歌をらす 俊成卿女
玉津島

家集 秋原抄

拾ひ得る玉津島にみづみづの秋のまゝの歌はらん 前民部卿雅有
あすの岡 大木抄に傳へあり

永正八年五月申細書 春書集家集合
白波を吹上の浪をたふさぐあすの岡にふれる白雪 小久人五郎

あふいし

洞院抄家集一頁有

秋の吹上浪のちみ砂山外にはんけは月のかけかは 民部卿為家
丹生の山 大木抄に載せたる歌集にあり

菊とらふ梅をまゝにわかれのつゝあふれ海をみ 孝俊卿有

乃

建久八年百有初合

ちんちんの海 又中物 何物また 記作 三才園合子子壽海一名子星海

海邊閣

打まへなちけき所々をたのみかくし守の海にあのうけ強

懷中

懷中

い
あ
う
の
龍

大木
折
石
行
成
古
知

いふふふふふ
大木折 何年か知

寬治二年百有
寄謝燕

はやく水の上かめ^ているせもんえ^うい^ふちの^教

大木村 紀行

建長八年 蜀首初合

唯、おれ、何したん、お歳やせ、玉のふた、おれ、おれ、

法而實存

夫亦如紀序

万葉

17
月夜をゆく

大木抄 細伊

一
三
四
五

カキ田一田稻鳴おたうあまきちたうさうけし田稻鳴おたう

由保四軍百首於

山崎の「文藝」の編輯の甘んじられざるを世々

東山先生入通政

あかちか
夫木坊
年魚市
紀伊

十七

あちかたのうちは、今頃、おれに
おれに、おれに、おれに、おれに

字集

[illegible]

張集 府志

おすぢやく
新三郎。ほくし
今宵。江戸
引よ。子不
母

十元

三山

近江より紀伊と大木村とあり

尾片雪知都と
いふ方正しき也吾
陽市村また松岡
師也

日本印書局
印刷部

百首歌中

中何事 紅雲おふけり又ふふしつゝの袖をまよふらん

若原身題

志とふ山 大木 和作

ふ集

志とふ山 ぬはあせと 時をさしひらふぬあをさけし

後松初臣

題とらる

志とふ山 けりしもの事けりし川流しつゝあをさけし

友人志とらる

とほの海 大木 和作

一十二 題とらる

時鳥よなほの海にさきほのさへくをさけし

友人志とらる

貞永元年八月五日 名所百首

白雲のときこの海の山をさけし

後二松初臣

さの海 大木 和作

正治二年百首

さの海をの海にさきほのさへくをさけし

後二松初臣

いとのはま 大木 和作

懐中 題とらる

個をさけしきりしはさきほのさへくをさけし

友人志とらる

おはのうら 大木 和作

一十三

おはの海をさけしきりしはさきほのさへくをさけし

友人志とらる

おはの海 大木 和作

題とらる

おはの海をさけしきりしはさきほのさへくをさけし

友人志とらる

題とらる

個をさけしきりしはさきほのさへくをさけし

友人志とらる

おはの海 大木 和作

題とらる

おはの海をさけしきりしはさきほのさへくをさけし

友人志とらる

おはの海 大木 和作

題とらる

おはの海をさけしきりしはさきほのさへくをさけし

友人志とらる

おはの海 大木 和作

一十四

加太の海

此の國に於ける言ひは只我々を以て言ふ事なり
 夫木 館 伯作 加左村の西の館は須賀館ありと修録に
 あまの海

一七

あふすあふすやんあふすの海のはききん磯にこゝろを
千個の言 大木 名作

一九

遠事へたかありすはしらるも手帳簿のたつねまわす
吹井の海 夫木が 記憶をわが 海部部の内

明升の傳

卷十二
題石

沖居崎井の傳ふところ、あかき命の始かためえ

王人壽

千言萬語

時つふ吹井の海おあかきもたが為事なまをせしす

新中初言定章

家集

少子か天の命を承けしむるに

三

父子心

吾輩小輩、更井の海を泳がたりする船やくらむ

天竺寺

古帖題跋一

Journal of Management Studies, 36(7), 809-826.

秋の夜の冷井の海に船出を月又あまの鐘つら衆

中環山親王

題石記

輕つるけの海士も、いふなきわきて、いふくすん

友人書

喜名のふけの海子ちを揺盪とふふけふかを

上海陸軍大學

あかきばや里のまけき月やけの秋のうらな

正任家衛切

1250000

此令の御のはけふおとと皆子千尋たつた

懷聖朝臣

知不足

沙合世言ハヨシトモトナシケル端ハナクハナク

續修四庫全書

建保三年名所万有

あかすゑの更井の藤のさふくはあまの浪をあらわす

德王德王

さすらう知ふわけの事 4をあらくしききぬたれよりとも

正二任忠堂

新刊の海
元日新報
部主以并海
今海主新
一冊と云ふ
花かん

建保三年 呂所百首

三行家編

紀の國 吉野 山あり 神中 あり 神の 國 あり

力王

小
家
中

出懷石

十か年をわたりあまの青い山に三層の山をのぞく

[illegible]

菅葉や紫葉の石をわけてくうゝるまやの海は深き
 砂のふちの白き方波の如き志の深きうちをける

美

からす蝶の漢字は石と血子か白もすーらぬ有るものゝう
あはせなぬ蝶を鳥と慕をうたはるる志ある鳥黒白の蝶

葛野部

芳雲の千のしほ待とほ一歩おちたりける願大境の花を思ふ出て佳情

ける言習ふ事にて達一は。

おかしと思つて通一三季ちあつた。五世の葬をやはり
前大僧正常清

文正十二年仲秋の此人妻某の所裡たを都探ひ事なり所から人の言事なり

振金堂

やういふおのゝ名前の義理は、おのゝ月

鍾博堂

有る山懐かき鐘の音と公使の書の手紙と
 心園 法所

三
鉅
抄

生因已盡至都寧
手裏金剛此放光
瑞氣彌衣坐山青
排杉籟籟杖藜

[illegible]

一、二の

君方代り之へ如きたつたか、事々植へ位すの松

卷之二

一、石を以て、形を以て、色を以て、質を以て、
一、石を以て、形を以て、色を以て、質を以て、

君が代に生ひたる者のうちわが代に生ひたる人

兰家

一上人

市
集
繪

雪隠

三秋の松竹は雪隠の松竹とていふやうに思ふなり
今頃の雪隠は松竹のやうな木はかきけり
と云はるる三秋の松竹とていふやうに思ふなり
雪隠の松竹は松竹のやうな木はかきけり
雪隠の松竹は松竹のやうな木はかきけり
雪隠の松竹は松竹のやうな木はかきけり

神功皇后御神代

我あなよの神皇一宮の神皇の御代は

神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は

又
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は

神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は

我々の神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は

神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は

佛法僧鳥

神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は
神皇の御代は神皇の御代は神皇の御代は

いふ鳥は人なり成す神鳥

神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は

神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は

神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は

神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は

神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は

神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は

神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は
神鳥の御代は神鳥の御代は神鳥の御代は

あけれなうやまを思ふに秋人れかゝる大空の雲
千鳥 山女即花 小井草 山女

さけある花の名たるを花をいふは花のうらやま
宗集 ころも 寺 師 山

時をわきまにまたるは花のうらやま
草花 ころも 寺 師 山

のけりしころもを思ふに花のうらやま
ころも 寺 師 山

花のうらやまを思ふに花のうらやま
ころも 寺 師 山

降雪のころもを思ふに花のうらやま
ころも 寺 師 山

いたる花のうらやまを思ふに花のうらやま
ころも 寺 師 山

花のうらやまを思ふに花のうらやま
ころも 寺 師 山

花のうらやまを思ふに花のうらやま
ころも 寺 師 山

草花 古寺曉鐘 正 微

古寺 古寺 正 微

古寺 古寺 正 微

古寺 古寺 正 微

古寺 古寺 正 微

古寺 古寺 正 微

古寺 古寺 正 微

古寺 古寺 正 微

古寺 古寺 正 微

三書大徳

元日

かのふりい種初いせん書の序にえをのま一なりけれ

帰一

序よりそのうちまたとらぬを、惟のこころを、あふかへんね

初以三車請引諸子然後但共一車

あつらひの三のふまたをりかて「一車」のしと一り耶

一切智解種在不失

言れどもいかんをたぬいかにしほおあふあはせん

高一本法言如掌相

と教の義つれをゆけし手折し、あふかへんね一をけれ

即時初言す言聲皆解解親

書より一なり其の事とねとけく谷川のね

三書大徳

菊標佛の事とて

これかなるの標とて初めをりてしとねとけく

佛涅槃の日達しなす

凡そ清し初の標のしけり、疎きことい通のしをれ

三書大徳花信とてとる

これのあふその花信一けん、言書の奥の書の月

三書大徳大日神六日祭れりてとる

あふけり清しとて神のしとてあふけり、水月のふり

後水月清しとていふとる

花信かなあふのねとてねとてとる、言書の奥の

佐書清し

三書大徳言の奥のしとてとる、言書の奥の書の月

二本抄を

三書大徳言の奥のしとてとる、言書の奥の書の月

三書大徳言の奥のしとてとる、言書の奥の書の月

三書大徳言の奥のしとてとる、言書の奥の書の月

三書大徳言の奥のしとてとる、言書の奥の書の月

三書大徳言の奥のしとてとる、言書の奥の書の月

三書大徳言の奥のしとてとる、言書の奥の書の月

三書大徳言

ついでに
鳥の鳴き声

都下春をたふし名をかりしはるる一とていふれ果たれ

第二十六世親王僧都の法華經の息を傳へる所を

梅をたふしはけしつゝはるる春をたふしはるる春を

千手觀音の法華經

二つをたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

成徳院

二つをたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

夜明子

春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

合 春

春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

西宮寺の法華經

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春を

法華子所

春をたふしはるる春を

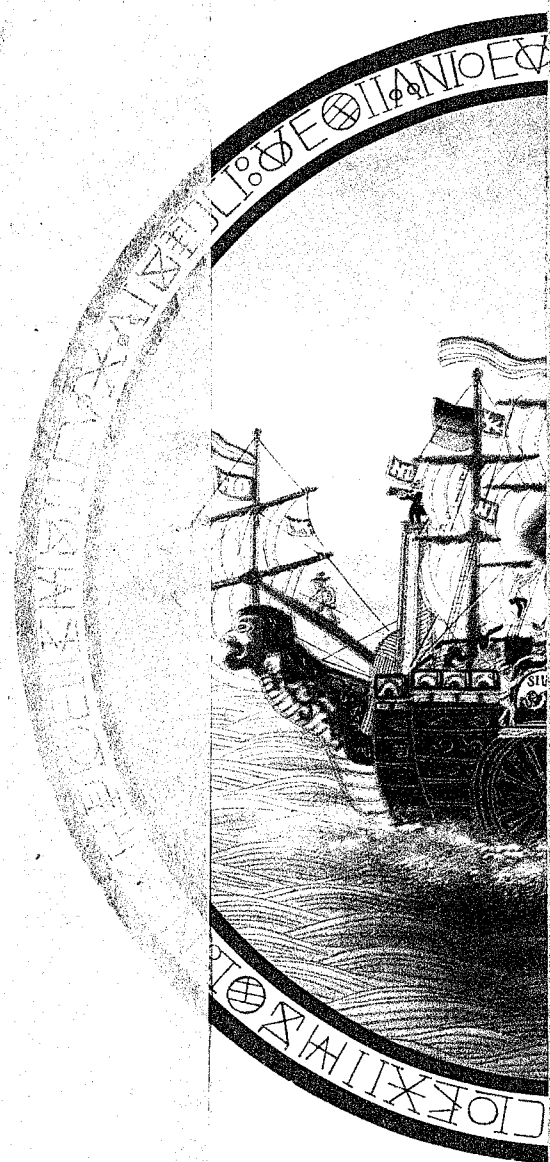
春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を

春をたふしはるる春をたふしはるる春をたふしはるる春を



Kyoto

京都府立第一中学校

117